

～週刊オン★ステージ新聞「バレエとオペラ」関連企画 VI～

薄井憲二バレエ・コレクション常設展

vol. 85

《アリオダンテ》

会期／2021年5月13日(木)～8月29日(日)

(※休館日はwebでご確認ください)

連載／岸純信(オペラ研究家)

協力／渡辺真弓(オン★ステージ新聞編集長/舞踊評論家)

企画・構成／関典子(薄井憲二バレエ・コレクション・キュレーター)

現在、「週刊オン★ステージ新聞」(青林堂)にて連載中の「バレエとオペラ」関連企画として、常設展をシリーズ開催いたします。本展では、「薄井憲二バレエ・コレクション」から図版提供した記事と共に、実際の資料をご覧ください。第6弾は《アリオダンテ》(2020年10月16日号「バレエとオペラ」第17回)より。どうぞお楽しみください。

「バレエとオペラ」第17回 岸純信 作曲家と舞踊家の友情《アリオダンテ》

ちょうど2年前、NHK-FMの名物番組『オペラ・ファンタスティカ』でヘンデルの歌劇《アリオダンテ》(1735)を紹介すべく、楽譜とライブ音源を照らし合わせた筆者は、あることに気づいてニンマリした。それは「バレエ場面が残っている」という状況であった。

《ラ・ジョコンダ》など一部の超有名作を除き、第2次大戦後のオペラ公演ではバレエを省く姿勢が横行した。主にはコスト削減のため。でも、それでは作品全体の理解が損なわれてしまう。だから、「放送で『今回は舞曲をカットしています』と言わなくて良いんだ!」とほっとしたのである。

ロンドンで初演された《アリオダンテ》は、今も上演される傑作のひとつ。(中略)原作はルネサンス期の詩人アリオストの長編叙事詩『オルランド・フリオーソ』。(中略)

この《アリオダンテ》の一大特徴は、先述の通り、「舞踊場面を挿入した伊語歌劇」であること。19世紀でも同種の試みは少ないのに、18世紀前半の実例となると本当に珍しい。その背景にはヘンデルとある舞踊家の友情が絡んでいた。それが、女性振付家としても高名な仏人、マリー・サレ(1707-56)である。

実は、ヘンデルがロンドンで初めて書いた《リナルド》(1711)の世界初演時に、当時まだ4歳のサレが助演で出て

おり、その才気を認めた作曲家が、大人になったダンサーと再会した結果、「ならば是非に」と彼女のための曲をたくさん盛り込んだのである。

《アリオダンテ》は3幕立て。舞曲はいずれも各幕の終景に置かれ、歌とも一瞬絡んだりして劇的効果を挙げる。筆者が特に好むのは第2幕の様々なアントレや終幕の小粋なアッラ・ガヴォッタ。近年では2017年ザルツブルク音楽祭の舞台が話題になり、独人アンドレアス・ハイゼがダンサー8名の性を曖昧に表現させ、仄かな官能性を帯びた仕上がりで好評を博していた。

ちなみに、冒頭で触れた放送に臨む直前、筆者は別のことにも気づいて目を丸くした。ヘンデルは実は相当なる舞曲愛好家であったのだ。ハンブルクで披露したオペラ処女作《アルミーラ》(1705)の中にも、彼は既に、リゴドンやサラバンなど踊りをふんだんに盛り込んでいた。

「へー、19歳の新人が!へー、ドイツで!」と驚きを隠せぬまま、マイクの前に座ったが、秒数の関係で朗読原稿には一言も足せずじまいになった。だから、本稿でその情報を記して嬉しく思っている。

出展資料(全てアンティークプリント)

- ◆ AP-151 マリー・サレ/1774~1775年頃
- ◆ AP-126 マリー=アンヌ・ド・カマルゴ/19世紀
- ◆ AP-147 マリー=アンヌ・ド・カマルゴ/年不詳
- ◆ AP-166 マリー=アンヌ・ド・カマルゴ/1730年



参考映像

- ◆ ザルツブルク音楽祭 2017 《アリオダンテ》

<https://youtu.be/GiU7Tsz0KPM>

- ◆ Handel: Ariodante - Cecilia Bartoli
from Salzburg Festival

<https://youtu.be/OunptvfrELI>



兵庫県立芸術文化センター

〒663-8204 兵庫県西宮市高松町2-22

tel: 0798-68-0223 fax: 0798-68-0212

※ 禁無断転載・複製・引用